

「文化」の現場を歩く

第8回

人材・施設・手法

静岡文化芸術大学教授

松本 茂章

札幌市の札幌駅前通 地下歩行空間

◆雪の札幌と地下通路

札幌は吹雪が吹き荒れていた。2016年12月初旬に訪れた北都。雪用の靴ではなかったため、路上で何度も転倒してしまっただけで、地下鉄さっぽろ駅から大通駅まで伸びる「札幌駅前通地下歩行空間（チ・カ・ホ）」に避難した。南北520メートル、幅員20メートル。暖房が効き、多くの人々が往来していた。市内を貫通する地下鉄南北線は、さっぽろ駅の一つ南が大通駅、二つ南がすすきの駅。この3

は同社の特徴を三つ挙げた。一つには財政的な自立、二つには行政と民間の協働（市の出資額は全体の3%）、三つには積極的なアートの活用である。財政は広場利用料や広告収入に支えられている。15



アート作品が展開される札幌駅前通地下歩行空間（両脇が条例上の「広場」）

駅間が地下通路で直結して市中心部は雨でも雪でも地上を歩かなくてすむようになった。2011年3月に開業して6年近く。今では地上を歩く人が多い夏場で、平日は5万5000人、休日は4万4000人が行き交う賑わいを見せている。

都市再開発に26年間携わってきた札幌市都心まちづくり推進室長、高森義憲（1959年生まれ）によると、地下鉄南北線が札幌冬季五輪（1972年）に合わせて開業した際、大通駅一すすきの駅などに地下通路が誕生。しかし官公庁や民間オフィスが多かったさっぽろ駅一大通駅は、地下通路建設が見送られた。その後、国鉄民営化後のJR札幌駅南口再開発事業などで同駅前の商業集積が進み、同駅と大通駅の両商圏をつなぎ都心の回遊性を高める必要が生じた。行政の決断で事業費252億円の地下歩行空間の建設が決まった。地上は市道と国道に分かれており、市は172億円、国土交通省は80億円を負担した。

札幌駅前通は地上の道幅が36メートル。うち行政が中央の20メートル分を掘った。地下でも法律上は道路で、イベント年度の場合、収入は約2億4000万円。このうち広場使用料・広告収入は2億1400万円である。一方で支出の25%の6300万円はまちづくり事業に回される。株式会社ながら出資者への配当は行わず、同事業を展開する公益的な存在なのだ。

エリアマネジメント会社として正社員10人は全国的にも珍しいうえ、現代美術作家の今村育子（1978年生まれ）を正社員に雇った点も先駆的である。文化事業を企画運営しており、パブリックアートを展開する「PARC」などの同社自主事業を担当する。「作品の搬入・搬出のルールづくり、脚立に登って展示用照明を取り付ける作業、チラシの作成などのできる人材が必要となり、知人から『入社試験を受けてみないか』と誘われた（今村）。このほか、同社では広場の未使用空間を大道芸などのパフォーマンスに無償で提供し、にぎわいを作り出す取り組みも実施。年2回のオーデイショ

ト開催等に厳しい制限が課される。そこで地下歩行空間の両脇各4メートル（計8メートル分）や交差点の地下は、市が「広場」として条例決定した。高森は「道路でもあり、広場でもある。全国的にも珍しい取り組み」と笑顔で語った。

◆地下通路がアートの孵化器に

筆者が訪れた際、地下歩行空間では「さっぽろアートステージ」が開催中だった。市が委託金を実行委員会に支出して11月5日〜12月4日まで実施。空間両脇のスペース（広場）にはプロのアーティストによる現代美術作品の公開、高校生が制作した絵画などの展示が行われていた。ときには音楽会も実施される。他の地下通路などを会場に始まった秋の恒例行事だが、開業後の同空間に会場を移して来場者がぐんと増えた。市によると2015年度における同空間の来場者は82万人余りに達した。

「公の施設」である地下広場の場合、官民出資の札幌駅前通まちづくり株式会社が市から指定管理者に選定されている。社長の白鳥健志（1949年生まれ）

ンを行う。このように札幌では地下通路が芸術を育てる「孵化器」なのだ。

◆500メートル美術館と 札幌国際芸術祭

地下鉄・大通駅の東側に位置する別の地下通路は、壁面を利用して常設展示場に改装された。「500メートル美術館」である。先述のアートステージ会場として05年から使われていたが、地下歩行空間開業の11年から常設化。同市が5840万円を投じて照明付きショーウィンドー（厚さ60センチ）とパネルを新設した。年4回の展覧会が行われ、3回はプロのアーティスト招聘を、年度末の1回はプロアマ問わず公募した企画を実現する。ディレクター高橋喜代史（1974年生まれ）一般社団法人PROJECTA代表理事）は「1日1万人近く通る。それだけに作品の質を高めたい」と熱っぽく語った。「初年度は、酔った方が吐いたりするなど、治安の良くない通りだった。

アートが繰り広げられる「チ・カ・ホ」の試み

展示作業中、通行市民から『なぜこんなものを展示するのか』と苦情を言われたこともあった。しかし今では、展示照明のため通路が明るくなったうえ「通行の市民から『寒いのにご苦労さん』と温かい缶コーヒーや菓子パンの差し入れがある」(高橋)。

高橋は漫画家志望だった。著名な雑誌で奨励賞を受賞したこともある。円山公園近くのCAI現代芸術研究所が開くアートスクールを卒業後、上京して漫画の修行をしていたが、30歳のとき現代美術の創作活動を行うために帰郷。アートのPO法人S・AIRの職員として勤務している際に500メートル美術館を企画運営する仕事に携わるようになった。高橋と今村は同スクールで一緒に学んだ仲間。2人とも作家活動を続けながら、アートマネジメントの仕事に就くようになったのだが、「市民と芸術文化をつなぐ企画を考える人が少ない。仲間を見つけなければ」と痛感している。高橋はボランティアグループ「500メートルズ」を組織して年間20回ほど企画会議を重ね、自主企画を指導する。今村は16年に

同まちづくり会社主催の「シンクスクール」を立ち上げた。1期生は21人。ともに、アートでまちを面白くする人材が育つことを夢見る。

2人が期待しているのは札幌国際芸術祭である。14年にスタートして3年ごとに行われる。2回目が17年に開催されるので「札幌に現代美術などの芸術文化が定着するきっかけになれば」と願う。同芸術祭実行委員会の総務係長、佐藤善宣(1977年生まれ)は市職員で文化振興課と兼務する。「2017年には一層の市民参加を求めていこうと考えている。たとえば500メートル美術館では招聘作家と一緒に市民ボランティアが展覧会をつくりあげていく企画を進めている。多くの市民アートマネジャーを育成したい」と期待を込めた。

◆エリアマネジメントの 新たな取り組み

話を地下歩行空間に戻そう。通行量は年々増えている。開業時に比べて平日は2.7倍、休日で2.1倍に増えてきた。外国人観光客も多い。これからはどうな

るのか? 同社社長の白鳥は「東京など大都市圏の都市再開発は、ビル所有者が地域を活性化して自社ビルの価値を上げることが目的とする場合が多い。地方都市では行政と民間の協働が不可欠」としたうえで「札幌駅前通地区のまちづくりの主役は、ビル所有者ではなく、ここで働くビジネスパーソンたち。彼ら彼女らがまちづくりや文化事業に参加できる仕組みをつくりたい」と語った。

一方で、壁の広告、広場の使用とも高い稼働率にあり、これ以上は望みにくい。そこで白鳥は、エリアマネジメントの会社として、地下歩行空間の外でも社会貢献できる会社を目指そうと考えている。すでに北海道旧本庁舎(赤レンガ庁舎)東側地上にある北3条広場の管理運営を手掛け、14年以降毎年8月に地域の盆踊りを行っている。白鳥は「わが社と民間不動産業者の間で協定を結び、ビルの中に新たに設けられる公共のスペースの運営を引き受けられないか。たとえば、いろいろな人が出入りして、このまちについて気軽に話し合えるカフェの経営などをしてみたい」と語った。(敬称略)